

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：27104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23792665

研究課題名(和文) 東アジアにおける子どもを喪失した夫婦の悲嘆過程とケアの検討

研究課題名(英文) Examination of a grief process and the care of the couple who lost a child in the East Asia

研究代表者

吉田 静 (YOSHIDA, SHIZUKA)

福岡県立大学・看護学部・助教

研究者番号：30453236

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：1年目に行った文献研究では、中国、韓国ともに子どもを喪失した夫婦へのケアは行われていないことが明らかになった。また看護教育の中に死別ケア教育が取り込まれていたが十分な時間ではなかった。またグリーフプログラムの先進国であるアメリカのグリーフプログラムの視察した。2年目3年目は研究を実施する予定であったが外交問題による反日運動の活発化、社会不安により渡航することができなかった。4年目に実施予定であったが、研究者自身の体調不良のため研究成果を出すことがないまま終了してしまった。しかし本研究に興味を持った協力者と出会ったことから今後、アジア全体を俯瞰した死別ケア研究を実施したいと考えている。

研究成果の概要(英文)：In the documents study that it performed in the first year, it became clear that, the care to the couple who lost a child were not performed in China and Korea. In addition, bereavement care education was taken in nursing education, but was not enough time. Of American grief program which is a developed country of grief program again inspected it. I was going to carry out a study in the second and third years, but was not able to make a voyage by activation of the anti-Japan exercise by the diplomatic dispute, social uneasiness. I was going to carry it out in the fourth year, but have been finished due to poor physical condition of the researcher. However, I want to carry out the bereavement care study that overlooked the Asian whole in future because I was able to meet the cooperater who was interested in this study.

研究分野：グリーフケア

キーワード：中国 韓国 アメリカ グリーフケア 宗教 文化 看護教育

1. 研究開始当初の背景

近年、日本での死別ケアの対象は胎児から終末期まで幅広く、また遺された家族へのケアまで全人的に行われている。そのケアもホスピスや緩和ケア病棟といった限られた場所だけではなく一般病院・地域在宅へ広がりを見せている。海外では死別ケア研究が多く行われているが、その中心は欧米諸国であり、日本を含むアジア人に焦点を当てた研究は少ない。

2. 研究の目的

東アジアにおける子どもを喪失した夫婦の悲嘆過程とケアの実態、ケアニーズを明らかにし、子どもを喪失した夫婦へのケアモデルを提案する。

3. 研究の方法

平成 23 年度 (1 年目)

中国、韓国の死に対する文化的背景、宗教観、死別体験者へのケアなど文献研究を行い、各国の文化的側面に沿った悲嘆過程と死別ケアの実態を明らかにする。またグリーフケアプログラムの先進国であるアメリカのグリーフケアプログラムの視察をすることで、東アジアにおける死別ケアモデルを検討する。

平成 24 年度 (2 年目)

中国人、韓国人の子どもを喪失した夫婦へ面談を行い、悲嘆過程の経過と感情の変容、提供された死別ケアとケアニーズを明らかにする。また看護者が提供しているケアや支援について詳細に尋ね、死別ケアの実態を探り、中国、韓国の看護状況と夫婦の求めるケアニーズの差を明確にする。

平成 25 年度 (3 年目)

平成 24 年度に研究を実施することができなかったため中国韓国へ渡航し、研究を遂行する。

平成 26 年度 (4 年目)

平成 24、25 年度に社会不安を主として、中国韓国へ渡航しての研究を行うことができなかったため、両国にて研究を実施した 3 年間の研究成果をまとめる。

4. 研究成果

(1) 文献研究

対象文献は「医学中央雑誌 WEB 版 (1989 ~ 2011)」、「PubMed (1989 ~ 2011)」であり、「中国」「韓国」「死」「文化」「看護」「助産」「教育」のキーワードを掛け合わせ得られた文献のうち、中国、韓国の死生観や宗教観に関するもの、看護や助産教育の内容が記載されているものを選択した。

① 中国人、韓国人の子どもを喪失した夫婦の死別ケア研究

中国において「高齢者」を対象とした悲嘆研究報告が 1 件見られたが、中国、韓国ともに子供を喪失した夫婦の死別ケアに関する研究論文は見当たらなかった。その理由として、中国では家族との死別悲嘆は個人で処理すべきであり、公の場で他人と分かち合うことが奨励されていない文化があり、韓国では

看護基礎教育の中でホスピスケアがほとんど行われておらず、一般に認知されていないことが考えられる。しかし死生観に関する研究は多く行われており、死と向き合った経験の有無や個人の宗教観が「死への恐怖」「来世への期待」などに大きく影響していることが明らかになっている。

中国、韓国の死別ケアの現状と中国、韓国の看護・助産教育の内容と現状

両国ともに教育科目の中に「臨終看護 (中国)」、「ホスピスケア (韓国)」が含まれているが看護教育者の数自体が少なく、学生に十分な教育を行うことができていない。しかし、日本同様に看護教育が専門学校から大学、大学院教育へと移行しつつあるため、今後充実した教育が行われることで社会全体に広く浸透すると考えられる。

(2) グリーフプログラムの視察

平成 24 年 3 月、アメリカにおけるグリーフプログラムに参加し、アジアと比較するための検討を行うことを目的として Legacy Emmanuel Children's Hospital、Oregon Health Science University、The Dougy Center の 3 施設を訪問した。

① The Dougy Center

Dougy Center はオレゴン州ポートランドにあり 1982 年、アメリカで初めて死別を体験した子どもたちのピアサポートグループを提供する団体として設立され、センターの役割は死別を体験した子どもたち、ティーンズ、成人 (若年) そして家族たちにそれぞれの体験を安心してシェアできる安全な場所を提供することである。

研修では「グリーフとは何か」という概念やセンターの理念に関する説明から始まった。グリーフは喪失に対する当たり前の反応であり、人によって表現方法は様々である。特に子どもは「グリーフ」という言葉自体を認識していないこともあるため、センターに来る子どもたちは、遊びを通してグリーフの整理を自ら行う。そのため子どもに寄り添うファシリテーターは子どもに口出しすることなく、指図することはない。あくまでもグリーフ体験者に「センター」という場を提供しているだけであった。

研修では講義を受けるだけでなく、演習も多く取り入れられていた。それは参加者自身が子どもになりきって学ぶためである。そのため自分自身も子どもになりきってコミュニケーションスキルを学習した。さらに参加者同士で「子ども役」「ファシリテーター役」になりきり、初日に学んだコミュニケーションスキルを生かして遊びの中でグリーフを表現する体験学習を行った。最後に研修で学んだ全てのスキルを用いて、実際のセンターの企画・運営のロールプレイを参加者同士で実施した。この体験を通して自分自身が一人ひとりのグリーフを仲間として皆で分かち合うことで、仲間の暖かさを体感した。体験を語るということに大きな意味があること

を知ったため欧米とアジアには文化的差異があるが、アジアにおいても同様のプログラムが必要であると痛感した。

Legacy Emmanuel Children's Hospital 病院では、病棟 (NICU、GCU など) を中心に見学し、最後に看護師、心理士、ソーシャルワーカーの4名からアメリカにおける小児看護や家族看護の現状について説明を受けた。

Oregon Health Science University Oregon Health Science University を訪問し、看護師・ソーシャルワーカー (以下 MSW) として活躍している Jillan Romm 氏よりアメリカでのペリネイタルロスに関する現状やグリーフケアの状況などを講義として受けた。Romm 氏は現在、産婦人科に所属しており主として流産や死産、新生児死亡によって子どもを喪失した女性や夫婦を対象に面談を行っている。私が最も知りたかったことは子どもを喪失した父親の悲嘆についてである。日本では社会文化的背景として「男性は泣いてはならない」「父親は母親を守る立場である」という風潮が強く、喪失した悲しみは夫婦共に同様であってもその思いや感情の表出に差異が見られ、その後の夫婦・家族関係にまで影響することもある。そこでアメリカでの父親に対するグリーフケアの具体的内容を知りたかったのだが、アメリカにおいても父親は自らの感情を表出することは少ないということであった。そのため父親に対して、悲嘆の経過や表現は男女によって異なることやグリーフと愛着は同じものであること、また身体へ現れやすい症状 (眠れない、食欲不振、頭痛・胃痛・腹痛など) を具体的に伝え、グリーフ経験者にとって当たり前であること (正常な反応であること) を助言しているとのことだった。また次子の妊娠に対して恐怖を抱きやすいため、妊娠中から継続して夫婦に関わっているとされており、教えていただいた具体的な内容を今後の研究や教育に活かしたいと考えた。

(3) 中国、韓国における研究実施

平成 24 年度に中国、韓国へ渡航し、各国において子どもの喪失経験を持つ夫婦、看護職への面接を遂行する予定であったが、日中、日韓の間で勃発した外交問題による反日運動の活発化、社会不安により渡航することができなかった。

平成 25 年度再度両国へ渡航し、研究実施の遂行に努めたが、外交問題の影響が引き続いており、研究協力者の紹介を受けることが難しく、子どもを喪失した両親への面接を実施することがかなわなかった。

なお平成 24、25 年度は渡航しての研究実施を行うことができなかったため、国内での研究活動を中心に行った。

平成 26 年度、研究実施を行う予定であったが、研究者自身が体調を崩してしまい (入院) 研究成果を出すことがないまま終了してしまっただけであった。研究実施予定期間には成果を出

すことができなかったが、中国でのコーディネーターが見つかり、またタイとブータンにて研究に興味を持ってくださる協力者と出会えたことから、今後は東アジアだけに目を向けるのではなくアジア全体を俯瞰した死別ケア研究を実施したいと考えている。

平成 24 年

みんくるカフェ “悲嘆学スペシャル”

6 月に長野県松本市で開催されたセミナーに参加した。セミナーは 2 部構成であり、午前中の講演では、家族医療専門医である医師の終末期医療 (自宅での看取り) を中心とした内容であり、看取りの場面で、医師として配慮している点を 4 つ挙げられた。その配慮する点は、十分な身体的、精神的ケア 家族とのコミュニケーション 多職種との連携 (医師、看護師、ケアマネなど) 症状とケアについて十分な説明を行うことであった。また訪問看護師の講演では、終末期の自宅での患者・家族との関わりだけでなく、亡くなられた後にもお悔やみの手紙を出されたり訪問されるなど、継続したかかわりを持ち続けることで家族のグリーフに寄り添ってあることが事例を挙げながら話をされた。亡くなられた後のかかわりという点では看護師と同様であるが、立場の異なる葬祭業の方のお話では、看護師同様にお悔やみの手紙や訪問などを実践されており、遺された家族の声に耳を傾けることを念頭に置いて誠実にかかわられている実際を知ることができた。最後に話された僧侶は、現代では病院での看取りが大半を占めるようになってきてしまっていることを危惧していた。僧侶という立場柄、遺族の方に寄り添いすぎてもダメ、つつこみ過ぎてもダメと心がけており、改めてグリーフに寄り添う意味について考えることのできた時間であった。午後は、ワールドカフェとして、3 つのテーマから興味のあるテーブルに移動しながら様々な方々と話をすることができた。特に今回、開催場所が斎場ということから葬祭業者や僧侶の方、また自分の終末期を考えている 80、90 歳代の方も多く参加されており、性別や年代や職種を超えた貴重な話を多く聞くことができたことが自分に大きな刺激となった。

ドナ・シャーマン氏来日講演会

3 月に視察した Dougy Center の所長である演者であるドナ・シャーマン氏が 11 月に来日し、東京にて行われた講演会と終了後に行われたダギーセンター研修者交流会に参加した。センターに通う子どもたちから学んだことを中心とした講演内容であり、特に強調されていたことは、大人の勝手な判断で子どもたちに嘘の情報を伝えたり、情報そのものを耳に入れない、また選択させないということはその後のグリーフや人生に大きな影響を及ぼすということであった (例: 母親が自死で亡くなった事実を伝えず、家を出て行ったと話す。父親の死に目に子どもを立ち合わ

せないなど)。子どもの年齢に合わせた話し方の工夫は必要であるが、嘘をつき続けることは難しく、嘘だと分かったときには「家族の一員として考えられていない」ことへの失望感が大きい。ドナ氏の経験から、大人(親)が子どもにどう伝えようかと迷ったときには、そのままの気持ちを子どもに伝えるとよいとのことであった。

ダギーセンター研修者交流会には 30~40名の参加者があり、医療職だけでなく幼稚園教諭や社会福祉士、ボランティアで子どもたちに携わる人々など様々な人たちが渡米して研修を受けていたことを知り、とても驚いた。私自身は今春研修会に参加したが、交流会と一緒に研修を受けた仲間に出会うことができた。話をしていると、センターでの研修後より仙台で行われている子どもたちのグリーフの会にボランティアで参加するようになったとのことであった。また行政とともにグリーフ施設や今までなかなか目が向けられることが少なかった親を亡くした子どもたちのグリーフの時間を設けるなど様々な試みが行われていることを知り、多くの刺激をもらうことができた。

平成 25 年

Coco カフェ ~ 悲しみに優しくあたたかいオアシス ~

2 月に長野県松本市で開催されたセミナーに参加した。

午前中の講演では、遺族当事者の代弁を僧侶である飯島恵道氏(東昌寺住職)が行われた。その講演の中で強く印象に残ったことは「なぜ死んでしまったかと尋ねられれば、『私が殺しました』と答えるのが本当の答えだと思います」という言葉であった。また当事者自身が今も胸に秘めている多くの思いを知り、講演を聞きながら看護者である自分自身の看護観も改めて考えた時間であった。

また遠山玄秀氏(上行寺副住職)はテーマ「宗教家として、終活カウンセラーとして」より、自分自身が行っている活動を中心とした講演内容であった。人の死は誰にでも必ず訪れるものであり、避けられないことだからこそ自らの「死」と向き合うように動いた方がよく、具体的にはエンディングノートの作成とその存在(内容を含む)を家族で共有することを強調された。また自身が立ち上げられた「チームビハーラ」の取り組みを紹介され、人の死には家族の他、医療者(看護者)や宗教家(僧侶など)、葬祭業者など様々な人が関わっていることから、それぞれが個々に活動するのではなく連携を持った上でグリーフを支えあうことが必要であると述べられた。

山崎浩司氏(信州大学准教授)は長きに渡ってグリーフに関する研究を国内外で行われている方である。テーマ「死別者支援とまち(コミュニティ)づくり」で死別者の置かれた現状として、現代社会では死別の悲しみに個人で対処するしかなく、その悲しみは遺

族にしか認められていないことから公認されていない悲嘆もあることが紹介された(例:喪失対象との近い関係が公認されていない《離婚後の夫婦、同性愛者など》、悲嘆者の悲嘆能力が公認されていない《低年齢の子どもなど》)。そのために共有すべき死や死別の事実として、人は必ずいつか死に、孤立していても必ず社会の中で死ぬこと、死別反応は人それぞれであることなどを皆が知っておく必要があるために町単位でのつながりが必要であると述べられた。この課題に対して今後の4つの提言を国外(主にイギリス)の状況を紹介しながら終了した。

教育を通して全世代が死や死別の「事実」を意識し共有するよう目指されている

死別者が必要なときに不安や疑問を解消できる情報や機会が十分に提供されている

死別者やその支援者が政策立案に参加することが当然視されている

死別者がそこで生活を続けたいと感じる愛着のある物理的環境が整備されている

午後は、ワールドカフェとして3つのテーマから興味のあるテーブルに移動しながら様々な方々と話をすることができた。テーマは午前中の講演に引き続いて考えられるものが多く、特に遺族のメッセージは様々な発言の中で聞かれたことから、参加者の多くにとっても強く印象に残ったものと思われる。また実際に家族(夫、子ども)を病気や自死によって亡くされた方も参加されており、性別や年代、職種を超えた様々な話を多く聞くことができた。その中では医療者に対する声(不満や怒りなどが主)も多く聞かれた。今回の内容を今後の看護教育に生かすことができるように自分自身が今以上に教育・研究に力を入れる必要があることを感じた一日であった。

第 15 回ヒューマン心理ケア学術集会

7 月に聖路加看護大学で開催された学会に参加した。大会のテーマは「死別後もつづく絆」であり、そのテーマに沿って2つの講演(会長、教育講演)ともに死別によるグリーフケアに関する内容であった。

会長講演では、会長の所属する聖路加看護大学が運営している「天使の保護者ルカの会」の活動内容を主として話された。会に参加する子どもを亡くした親たちの話から医療者や家族の無意識な言動が親を苦しめていることを改めて感じた(亡くしたことを早く忘れなさい、次の子どもを作りなさい、交通事故にあったようなものだよ等)。

教育講演では Nigel P.Field 氏の長年の研究結果を元とした内容であり、死別と悲嘆を愛着理論から理解することをテーマとしたものであった。Nigel 氏は国際学術誌 Death Studies 副編集長であり、カンボジアをフィールドとした家族を喪失した遺族の悲嘆とトラウマ体験を主な研究を行っている。カンボジアでは近年まで独裁政権による大量虐殺が行われていたことから、平静を取り戻し

た現在もその体験や記憶に苦しめられている人が多いという。これはカンボジアだけに当てはまることではなく、地球上で紛争や戦争が行われている地域にも同様のことがいえる他、日本でも阪神大震災や東日本大震災といった自然災害や多数の死傷者を出したJR 福知山線脱線事故など交通事故、また自死など暴力的な死別はカンボジアと同様であるといえる。この暴力的な死別となった場合、複雑性悲嘆となりやすく正常な悲嘆経過から外れた経過を辿りやすい(鬱病や統合失調症などへ移行しやすい等)。日本では死別による悲しみへのサポートがまだあまり行われていない現状であるが、今回の講演を通して大切な人を亡くした遺族への画一的でない各人の求めに応じた支援が必須であることを学ぶことができた。

午後からは一般講演が行われ、各施設で取り組まれているグリーフケアの実践や自助グループの活動報告、学校で子どもに接するスクールカウンセラーによる子どもとの関わりが報告され、子どもたちへの心理的なサポートの必要性を改めて痛感した。

「医療・介護従事者のための死生学」夏季セミナー

8月に東京大学で行われたセミナーに参加した。

清水哲郎氏(東京大学特任教授)による「死生学とは何か」「コアにおける死生の理解」では、Thanatologyの日本語訳は一般的に「死生学」である。Thanatologyの語源はギリシャ語のThanatos(death;死)とlogy(論)であり、直訳すると「死学」となり、日本語訳にある「生」は含まれない。日本で「死生」という言葉が初めて用いられたのは「死生観」(加藤咄堂著;1904)である。日本では古来より「死」だけではなく、死と同時に「生」も考えられてきた。それには仏教やキリスト教など宗教が人々の思想に与えている影響も大きく、日本には「輪廻転生」「甦り」(キリストの)復活」といった言葉が存在する。

堀江宗正氏(東京大学准教授)による「20世紀心理学の死生観」では、死生観には「ニヒリズムの死生観」と「宗教的死生観」があり、それらは対立している。その対立の間に派生したのが「心理学死生観」とされており、その死生観は今後「スピリチュアルな死生観」へと変容するだろうといわれている。この講義では講師が心理学の専門家であることから、歴史上有名な心理学者であるフロイト、ユング、フランクル、キュブラー・ロスの著書内文章を主とした時代の流れによる死生観の変化を学ぶことができた。フロイトの生きた第1次世界大戦(1910年代)の時代から、キュブラー・ロスが活躍した1960年代まで50年という時代が経過しているが、その中で印象的であった言葉は「生は喪失の連続である」「死があるからこそ生の一瞬一瞬がかけがえのないものになる」である。戦争という時代の流れの中で強く自らの「生と

死」を考えられてきた結果という点では、平和な現代の日本に生きる自己の「生と死」を深く考える機会がないような皮肉さを感じた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

吉田静・助産師としてグリーフケアプログラムに参加して、助産師教育ニュースレター第77号、東京：公益社団法人全国助産師教育協議会発行、2012年。

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉田 静 (YOSHIDA, Shizuka)

福岡県立大学・看護学部・助教

研究者番号：30453236